

「困った子は困っている子」

～奈良少年刑務所の子どもたちとのかかわりから見えてくる子育て術～

講師：(作家) 寮 美千子 先生

東京生まれ、作家として泉鏡花文学賞を受賞。その後奈良市に移住し、夫共にいろいろな建築物に触れられた中で、奈良少年刑務所に出会い一目ぼれ。その後2007年から2016年までの約10年間奈良少年刑務所において受刑者の社会性涵養プログラムの1つである「物語の教室」をご夫婦で実践されました。

受刑者の子どもたちと触れ合う中で、いろいろと見えてきた子どもたちの姿を社会の人たちにもっと知ってほしいと活動をされています。

奈良少年刑務所で出会った少年たちは、想像を絶する貧困の中で育ったり、親から激しい虐待を受けたり、学校でいじめられたり。みんな福祉や支援の網の目からこぼれ続け、加害者になる前に被害者であったような子どもたちばかりでした。それぞれの子どもが自分を守ろうとして、自分なりの鎧を身につけています。いつも無意味に笑ったり、わざとふんぞり返ったり、殻に閉じこもったり、いろいろな形で自分を守ろうとしているのです。

子どもたちは心が傷ついています。一番信頼しているはずの親から肉体的な虐待や精神的な虐待、ネグレクト、親の理想に沿おうとして出来ない自分を責め続けるなど、友達と遊ぶ暇もなくスケジュールを組まれる教育虐待というものも目立ってきているそうです。

そんな子どもたちの心の鎧を脱がせるために鍵となったのは、「詩」。そして「仲間」の存在でした。絵本の読み聞かせや朗読劇など子どもたちが主体となる活動をプログラムに取り入れられました。

この社会性涵養プログラムを受け、10年間で出会った186名の少年たち、ひとりとして変わらなかった子どもはいませんでした。

そこから見えてくる子育てで大切なことは、『待つこと』です。出来ないと言ってくる子に「頑張れ!」と励ますのも時と場合によります。無理な励ましが、かえって逆効果となり、心を閉ざしていくことになりかねない。

子どもの力を信じてじっと待つ。安心して安全な場としての家庭を作ることが大切だと遼先生は力説されました。

社会性涵養プログラムとして、遼先生が取り組まれた絵本の朗読や詩づくりなどは、まさに子どもたちにとって安心・安全な場所であったからこそ子どもたちは変わっていったのでしよう。

あるがままを受け入れることの難しさがありますが、未来ある子どもたちが傷つくことによって悲しい結果を生まないようにするためにも、「〇〇ができたから褒めてあげる」といった条件付きの自信ではなく「あなたが産まれてくれてここに居てくれて本当に嬉しい」といった絶対的な自信を育て、それぞれの家庭が子どもたちにとって本当の意味での安心して安全な空間であるように親が心がけて子どもと向き合っていかなければならないことを痛感しました。

